



2023年

5月第1・2週の主日礼拝説教要約

・5月7日：ルカ福音書 4：16 - 24 .

『 預言者と故郷 』

・5月14日：マタイ福音書 8：14 - 17 .
（マルコ福音書 1：29 - 34）
（ルカ福音書 4：38 - 41）

『 シモンとアンデレの家 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

主の霊が私に臨んだ。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主が私に油を注がれたからである。主が私を遣わされたのは、捕らわれている人に開放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、打ちひしがれている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。

ルカ福音書の4章18節の言葉です。諸説を勘案してみると、その時イエスは居住地(=勤務地)のガリラヤ湖畔のカファルナウムから移動して、安息日に故郷の、山間の僻地のナザレにある会堂を再訪しています。そこでイエスに聖書の巻物が手渡された時に読まれたのが上記の箇所です。前半はイザヤ書の61章の始まり後半は29章、ならびに42章の言葉が交互に合わさっています。

これらの言葉が、たった今、「今日あなたがた(=会衆)が耳にした時に実現した」とイエスは宣言します。けれども、ご自身が同郷人から、メシアはおるか“預言者”という扱いさえも受けないことを予見します。僻地の旧知の間柄においては預言者と会衆という関係さえ成立しないのだと。つまり、“実現”するはずのことも、実現しないままとなると。彼らの心底はすでにイエスに見抜かれていたも同然でした。

しかし、神の独り子が求めているのは、同郷人から何かを認知されることよりも、より多くの人々が救いに与り、神と人々が正しく向き合えるようにすることです。葡萄園の主人と農夫たちの譬えのような最悪の関係に陥ることなく(ルカ福音書20:9-19他)。

さて、「ナザレから何か良いものが出ることがあろうか？」と訝ったのは、イエスの弟子になる前の、同郷ガリラヤのナタナエルでした(ヨハネ福音書1:46)。ナザレは広大なガリラヤ(ほぼ東京都と同じ面積)地区の中でも最下層階級の、地の民(アムハーレツ)と言われる人々が居住している山間の僻地でした。ただし、福音を告げ知らせるためには又と無い「貧しい人々」がそこにはいたのです。イエスは本来、彼らの同胞でもありました。そのイエスが、故郷のナザレを出て漁師の町のカファルナウムへと移住し、様々な不思議な業を見せては人々に喜ばれたという噂が、町や村を往来する者たちを通して故郷に広まったようです。ナザレ人たち

は、興味本位で、イエスの帰郷を待ちかねていたのです。

全てを察知しておられるイエスは、その日、人々が実家に殺到して混乱が生じる前に自ら地元の会堂に出向いていたのでした。

神の独り子の力（神通力？）でも、通じない場所が、世にはあることを、この記事は物語っています。

その日、イエスは会堂から引きずり出されて、最後は町はずれの崖から突き落とされようとしたのでした（ルカ福音書4：29 - 30）。

《 シモンとアンデレの家 》

その家は、最古のマルコ福音書では、「シモンとアンデレの家」となっています。おそらくは兄弟の実家（生家）です。シモンとはペテロの本名で、彼とアンデレは兄弟でした。二人ともガリラヤ湖の漁師をしていましたから、その家は船屋のようなものだったかもしれません。その家がもしシモンの名義だったとすると、彼が長男で親の代から受け継がれた家だったかもしれません。さらに、彼の妻と姑がそこに同居しています。カトリック教会の説では、この“妻帯者のペトロ”が初代のローマ教皇なのだそうです。イエスが山間の僻地のナザレからガリラヤ湖畔のカファルナウムに移り住んだ理由は、預言者が「故郷に容れられない」という容易ならざる事態とも無関係ではなさそうです。

ヨハネ福音書を除く3福音書（共観福音書）では、イエスはこの湖畔の町で漁師をしていた兄弟と出会い、彼らを弟子にしていたのでした。

さてその日、兄弟の家には熱を出して臥せっているペトロの姑がいます。そのことが、近くの会堂で教えていたイエスの耳に入り、イエスは病人の住む家に直行します。ルカ福音書によると、彼女は「ひどい熱に苦しんでいた（4：38）」ようですが、イエスが彼女の熱病に向かって一喝し（同4：39）、その手をとると、すぐに熱が下がり、彼女は癒されます。すると起き上がり、イエスと同行者をもてなすまでに回復したのでした。

聖書には“姑”は無数に存在しますが、姑という立場で実名が明かされ、その存在に焦点があてられたのはルツ記に出てくるナオミです。彼女は夫

に先立たれ、その跡継ぎの二人の息子にも先立たれ、残された息子たちの嫁二人と路頭に迷います。そのうちの一人は、ナオミに説得されて実家に送り返され、新たな人生を模索することになりますが、義母に不動の忠誠を誓ったもう一人の嫁ルツのために、ナオミは活路を見出そうと、自分の故郷に連れ帰り、親族の中から嫁の再婚相手に相応しい該当者を捜し出し、(ルツに)新たな伴侶を得させます。このルツの子孫からダビデ王が輩出します。さらに福音書の系図によるとイエスのナザレの父親(=マリアの夫)の大エヨセフも同じ家系に属していたのです。

さて、イエスはギリシャ人の女性の子供やローマ人の軍隊長の子供も、分け隔てなく癒やしています。いや、そればかりかペトロの姑まで、幅広く癒やしていたのです。彼女はおそらくイエスの母親に近い世代でした。当時のユダヤ人の平均寿命は30歳に満たなかったと考えられます。長らえても、荒れ野の40年(出エジプト)と同じくらいで、一世代は全うされたと考えられます。

イエスの母マリアが、息子の昇天後も生き続けたのは、並外れた長寿の持ち主だったようです。同じく、ペトロを介して彼の姑もイエスから長寿の恵みを授かったのかもしれませんが。

この神の恵みを、マタイだけがイザヤ書(53:4)の引用をもって預言の成就(の一つ)と見なします。

彼は私たちの弱さを負い、病をになった。(彼が担ったのは私たちの病、彼が負ったのは私たちの痛みであった)

括弧内は旧約聖書の、より詳細な原文(和訳)です。この箇所は本来、「彼(苦難の僕)」本人が他者の身代わりとなって病苦を身に負ったと解釈されますが、マタイはこれを神の独り子自らが罹患するのではなく、彼が出会った病人の治癒に関して全責任を負ったと解釈しています。

メシヤによる神の救いの業は、旧約聖書に記された預言の成就の限界を超えて、これが実現することを、マタイは感じ取り、読者にも示したかったのかもしれませんが。